

## 研究プロジェクト3「遠山郁三日誌研究会」について

永井 均  
豊田雅幸

遠山郁三は東京帝国大教授を定年まで務めた医学者であり、一九三七年四月から立教大学学長、四〇年一月からは立教学院総長を兼務して戦時下の立教の舵取りを担った人物である。本研究会は立教大学に残されていた遠山郁三の執務日誌——一九四〇年四月から、総長と学長を辞す四三年一月までのおよそ三年分——を解説・復刻すべく、二〇〇八年度に立ち上げられた。構成メンバーは、老川慶喜立教大教授をキャップとし、以下、山田昭次（立教大名誉教授）、奈須恵子（立教大教授）、永井均（広島市立大准教授）、豊田雅幸（立教大助教）、茶谷誠一（成蹊大助教）の計六名である。

遠山郁三日誌は、戦時下のミッション・スクールの首脳が、日々激変する学内外の動静を克明に記した第一級の資料である。近年、『立教学院百二十五年史』（学校法人立教学院、一九九六〜二〇〇〇年）や前田一男・老川慶喜編『ミッション・スクールと戦争―立教学院のディレンマ』（東信堂、二〇〇八年）の基幹資料の一つにな

るなど、その重要性が注目されている。

例えば、立教は戦時中の一九四二年に、学院や大学の根本規則が規定する教育目的から、キリスト教主義の文言を削除するという重大な決断をしたが、その内情はこの遠山日誌によって初めて明らかになった。日誌にはまた、戦時動員に関する軍当局や文部省からの要請、配属将校の動静など、戦時下の大学（ミッション・スクール）を取り巻く社会的環境を浮き彫りにする手がかりが記されている。教員および学生の思想動向や植民地（朝鮮と台湾）出身の学生の扱いをめぐる、文部・軍当局など中央が何に関心を抱き、いかなる政策で臨んだのか——こうした戦時下の諸問題についても本日誌が提供する情報は多い。日誌には、文部省などが主催する大学関係者の会議記録もあり、当時の新聞からは窺い知れない具体的な発言内容の記述も含まれる。

本研究会のメンバーは、遠山日誌が、単に立教大学の歴史にとつて重要なだけでなく、大戦期の高等教育史研究やミッション・スクール研究の一次資料として、さらには大学における意思決定のあり方という今日的課題の「生きた素材」としても重要と考え、出版を前提に本格的な編纂計画に着手した。相当にくせのあるくずし字であり、様々な略記号が用いられている遠山日誌であるが、立教大学元職員で古文書解読の専門家でもある浅見

惠氏に筆耕を依頼し、その筆耕原稿をベースに校訂・編纂作業を重ねている。

研究会は二〇〇八年一月二八日に第一回会議を開催した。最初期の会議では、経歴や研究業績など遠山郁三に関する基本情報、他大学における日記刊行の先行例などの予備的な調査を実施し、二〇〇九年度から本格的な校訂作業に入った。以後、今日に至るまでほぼ二カ月に一度のペースで研究会を開き、日誌原本と付き合わせながら校訂を行うとともに、人名の特定や利用者の理解を助ける用語解説の対象の絞り込みも手がけている。遠山郁三日誌は解説を付して二〇一二年度に刊行される予定である。